

大きく変貌してきているように思われる。そこで、最近の小児初診患者61名についてアンケートを中心に、口腔内所見、全身状態、さらに家族構成など患児を取りまく環境について調査を行なったので報告する。

患児の初診時年齢は3才が最も多く、平均は3Y5Mで、非常に低年齢化しているように思われた。主訴はう蝕処置が最も多く、う蝕罹患率は96.7%、1人平均う蝕歯数は8.7本であった。また、う蝕罹患型は下顎前歯部を除いたB型、あるいは全歯牙の罹患を示すC型が多く、低年齢児のう蝕の重症化が認められた。また、治療経験がなく直接本学に来院する人が増えてきているが、これは保護者が専門医を選ぶ傾向になってきたものと思われる。歯の点検では、半数以上が毎日行っているものの、う蝕の増加と考え合わせると、点検の内容に問題があるように思われる。一方、全身状態について、今まで大きな病気にかかったことのある者は8.2%、アレルギーのある者は18.0%もあり、一見健康児と思われる子供でも、何らかの異常を持っている者が多くなってきていた。家庭環境では、平均家族数が4.4人、子供の数が平均2.0人で、半数以上の患児は第一子である。日中、主に養育するのは母親、ついで祖母であるが、病院に連れて来るのは母親がさらに多くなっている。来院にはバス、車などの交通手段を用いている者がほとんどで、平均通院時間は40分であった。地域別には、市外から来ている者が半数近くあった。しつけの面では、主に母親が叱り、母親中心の生活が伺われる。このような点から、母親の小児への影響の大きさが伺え、その結果、時には片寄った愛情過多が見られ、小児の歯科治療時における取り扱いの困難さを一層増加させてきている。このような点から、歯科治療そのもの以前に、歯科医と保護者、患児、そして医療従事者の信頼関係が必須と思われた。

演題10. 岩手県立中央病院歯科口腔外科における入院患者及び手術症例の臨床統計的観察(第一報)

○千葉 寛子, 新津 二郎, 中里 滋樹
小川 邦明*

岩手県盛岡市県立中央病院歯科口腔外科

岩手県都南村小川歯科医院*

今回我々は、昭和50年9月から、昭和58年8月までの過去8年間の岩手県立中央病院歯科口腔外科にお

る入院患者及び手術症例の統計的観察を行ったのでその概要を報告した。口腔外科的観血処置を受けた患者は、入院170例、外来202例計372例で総新患者7468名の5%であった。入院患者の非観血処置は62例で手術施行率は73.3%であった。年度別には入院症例は昭和52年が最も多く39例で昭和58年は8月31日現在で24例であり、外来症例は昭和54年が35例、昭和58年は28例であった。年齢別にみると、入院患者は20代、30代、40代が多い傾向を示しほとんど差はみられず、外来患者は20代が最も多く次いで30代以下50代、40代となっていた。月別手術症例では、入院症例は季節的変動はなく、外来症例は、4月11日が多く、9月、12月が少い傾向にあった。入院患者の地域別分布は盛岡市が74名で228名中32.5%、次に久慈市14名であった。来院経路は院内から36名、院外から89名で54.8%が紹介患者であった。入院日数は殆んどが2週間以内であったが、長期入院は悪性腫瘍患者においてみられた。疾患別手術症例は、入院外来あわせて最も多いのは嚢胞30.2%、次に歯の異常23.1%、そして炎症12.2%の順であった。入院患者の非観血的処置62例のうち最も多いのが炎症で非特異性炎34例で、特異性炎は放線菌症の1例であった。手術内容をみると、嚢胞は111例中最も多いのが術後性頬部嚢胞18例、処置は嚢胞摘出術62例、軟組織においてはクライオサージェリーが外来症例で多くみられた。炎症は45例で処置は抜歯と搔爬を兼ねた処置が22例で炎症の48.9%を占めていた。歯の異常は85例で処置は智歯抜歯が61例71.8%であった。奇形は13例、外傷は11例で、処置は観血的整復術が6例行われていた。良性腫瘍は41例で処置は腫瘍摘出術32例であった。悪性腫瘍は17例で同一患者における重複手術例が行われている場合もあり、処置は切除術やカニューレションなどであった。

演題11. X線写真における歯槽骨の評価について

○加藤 恵美子, 高谷 直伸, 奥山 千佳子
川守田 奈美, 増田 由紀子, 遊佐 奈保子
上野 和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

歯周疾患の診査のうちで、骨吸収状態の判定は、一般的には、X線写真によって行われていることが多い。通常は等長法のX線写真による四段階評価、或いは十段階評価によるが、等長法の撮影では、上顎臼歯

部のように頬舌的な幅をもつ齒槽頂部を正確に判定しにくいこともあって、判定者による誤差は、ある程度、免れないようである。そこで我々は今回、骨吸収度の正確さという点よりはむしろ、読みのバラツキという点を重視した、X線写真による評価を試みた。

検者は教室入局後2年と1年を経過した経験の少ない5名を選んでいる。用いたX線写真は昭和45年から50年までに本学第二保存科を訪れた歯周疾患患者の中から at random に選んだ27症例の全顎X線写真で、測定部位は前歯部3番の近心から反対側3番の近心まで、臼歯部は4番の近心と遠心、及び6番の近心とした。四段階評価を用いX線を10~20倍に拡大したのち教室で考案したX線スケールによって測定した。全ての検者間で一致する率は、上顎前歯部68.2%上顎臼歯部62.4%、下顎前歯部62.4%、下顎臼歯部73.1%となっており、危険率1%で下顎臼歯部が最も高く、また3人以上の一致率は98.8%~99.3%ではほぼ100%に近いという結果が得られた。

今回のX線写真による骨吸収度の読みのバラツキは、検者を多数にすると、四段階評価という、比較的大まかな分類であっても、検者によっては多少の差が生ずるとということが判明している。しかし、比較的经验の浅い検者による検索であっても、5人中3人以上の一致率は、ほぼ100%に近い。X線写真による骨吸収度の判定は、現在のような四段階評価で行う限り、多数で行い、上と下を除いた数値を以て表わす方法は、検者間によるバラツキの少ない測定法であるということを表わしていると思われる。

演題12. X線写真による大臼歯根分岐部形態の分類について

◦佐藤 仁哉, 渋井 発, 村上 弘之
中林 良行, 菅原 教修, 上野 和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

分岐部及び分岐部付近の齒槽骨の吸収形態を把握することは治療術式と直接の関連を有し、また炎症性病変の進展に関与する因子との関連を明らかにすることになる。今回我々は当科に来院した歯周疾患患者2919名のうち10代以降の患者463名について初診時の14枚等長法X線写真による下顎第1大臼歯の齒槽骨吸収形態について分類を試みたので報告する。

Glickman の根分岐部病変の分類により、I級, II

級, III級と3者に分類したところ、明らかに骨吸収の見られるII, III, IV級は被検歯926歯部中、約1/3にみられた。年代別に見た場合、I級は10代の88%から50代以降の64%まで減少の傾向を示した。また、II級について、30代以降で30%前後と10%台である10代、20代に比較し多くなっている。III級については、50代の8%を除けば20代から40代まで2~4%と年代による差は明らかではなかった。また分岐部に骨吸収のみられるII, III, IV級についてさらに分岐部のみに吸収の見られるA, 分岐部を含み近遠心歯根部に水平型の吸収の見られるB, 分岐部を含み近遠心根側の一方に吸収の見られるCの3者に分類した。Aは270歯部中63%, Bは20%, Cは17%を示した。年代別で見るとAは各年代とも著明な差は見られなかった。加齢的に増加すると予測した水平型吸収を示すBは年代とは関連がなく20代で41%を示した。これは年齢による退縮以上に炎症性病変の進展によって生ずることを示唆しているものとみられる。Cは30代で23%を占め、他の年代では10%台であった。

今回のABC分類による骨吸収形態の特徴を年代別に把握しようと試みたが、歯周疾患から抽出したX線写真では加齢に伴う変化は見られなかった。これは左右両臼歯群が対合顎との咬合を有する例に限定して検索したことにも関連があると思われる。今後は咬合要因を除外した分岐部における骨形態や歯周疾患患者以外の集団の各年代における骨形態についても同様の分類を試みたいと考えている。

演題13. 静注用ニトログリセリンを用いた低血圧麻酔時の循環動態の研究

◦水間 謙三, 中里 滋樹, 大坂 博伸
岡村 悟, 中塚 道郎, 中込 和雄
藤岡 幸雄, 岡田 一敏*, 涌沢 玲児*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学医学部麻酔学講座*

静注用ニトログリセリン(TNG)が開発され、その血管拡張作用を利用し、低血圧麻酔に使用されているが、その循環動態は不明な点が多い。

今回我々は雑種成犬を用いてGOF麻酔下にTNGを持続点滴し、収縮期血圧を投与前(対照値)の30%下げ、1時間前後維持した後、TNG投与を止め再び収縮期血圧を対照値まで回復させ、この間の循環動態